

『椀久一世の物語』の総合的研究

日比野 洋 文

第一章 『椀久一世の物語』その構成

第一章では、『椀久一世の物語』（以下『椀久一世』と略す）の構成における特徴を考察した。

井原西鶴の著した『椀久一世』の特徴とは、いったい何かと問われたならば、それは『椀久一世』以前の作品には見られなかったところの、物語としての一貫性であろう。『椀久一世』以前の浮世草子は、好色物に限れば『好色一代男』、『好色二代男』がある。されどこの二作品は、物語の一貫性は薄いと言えよう。西鶴の処女作である『二代男』ならば、主人公は世之介であるが、巻五以降は遊女評判記かのような形態をとるものと言われている。『二代男』の主人公は世之介であるが、必ずしも主人公を中心に、物語は進展していない。また『二代男』ならば、巻一の目録に「遣手の国が諸分物語の事」とあるように、世伝が年老いた遣り手から、諸国の遊里の諸分けを聞く、という形で物語が進展していく。『二代男』もまた、主人公世伝を中心とした物語とは言いがたい。

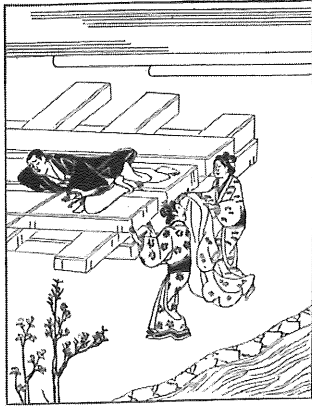
しかし『椀久一世』は先行作品と異なり、一貫して物語は主人公椀久を中心に進展していく。本作は椀久の金

銭の獲得から破産、そして困窮した生活、やがて哀れな水死に至るまでの姿が描かれており、常に物語の中心に主人公の姿が描かれている。つまり『腕久一世』は、先行作品にはなかった、物語としてのまとまりを得た作品であり、その構成には新しさが認められると言えよう。

第二章 『腕久一世』の挿絵

第二章では、『腕久一世』における挿絵の特徴を考察した。

以下に、本作の特徴的な挿絵である下巻「現の情物語」の挿絵を取り上げる。なお以下の挿絵は、決定版対訳西鶴全集4『腕久一世の物語 好色盛衰記 嵐は無常物語』（麻生磯次氏・富士昭雄氏、明治書院、平成四年）に依った。



下巻「現の情物語」



挿絵：a



挿絵：b

右の上段に取り上げたものが「現の情物語」の挿絵である。挿絵に描かれた場面は、下女を連れだした女が眠っている椀久に、着物を掛ける場面である。左側の材木の上で眠っている人物が椀久である。また椀久より向かって右側に立つ、手に着物を持ち櫛の模様の着物を着た女性と、撫子の模様の着物を着た女性は、本文にある「下女つれし女」と、その「下女」である。しかし挿絵からは、二人の女性のどちらが「下女つれし女」であり、「下女」であるのかまでは判断できない。

そして右に挙げた「現の情物語」の挿絵には、一つの疑問点がある。それは挿絵に描かれた二人の女性の着物の模様が、上巻の七に登場した死んだ椀久妻と、下巻の一に登場した離縁した久米の着物と、同一の模様であることにある。(挿絵… aが椀久妻であり、挿絵… bが久米である)。またこれら着物の模様の一致は白井雅彦氏*1、長澤麻衣子氏*2によりすでに指摘され、詳細に検証されている。

では「現の情物語」の挿絵に描かれた、二人の女性は一体何者なのであろうか。着物の模様が死んだ椀久妻と、離縁した久米と同一であるからといえども、挿絵の二人を椀久妻と久米であるとまでは断言できない。そもそも椀久妻ならばすでに死亡しており、久米も椀久と離縁して国へ帰ったとなつていたので、二人の女性を椀久妻と久米とするには不自然さが残る。ならば椀久と契りを結んだ松山ではないかと想像するのだが、特定できるような情報は作中のどこにも示されていない。あくまで「下女つれし女」とは、本文に「其のやさしきこはつき、人間とは思はれず」とあるように、椀久を好意的にみる人物であろうと推測するに留まるのである。

第三章 上巻と下巻にみられる対比表現

第三章では、『椀久一世』の上巻と下巻における関係性を考察した。

『椀久一世』には、上巻における栄華を誇っていた時分の椀久の姿と、下巻における零落した後の椀久の姿が、対比の關係を持つて描かれているという特徴がある。その椀久の栄華と零落の対比というのは、椀久自身の所在と密接に關係しており、その対比の描写が認められる箇所は、上巻と下巻の間を挟み重複した同一の場所・土地だけに限定されている。また右の栄華と零落の対比という構造は、笠井清氏*3、広嶋進氏*4によりすでに指摘されている。しかし両氏はその対比の關係のすべてを挙げられてはいないため、よって第三章では上巻と下巻における重複したすべての場所・場面の關係性を考察した。以下にその一例を挙げる。

①谷町筋

・椀久は、釣鐘町の懇意にする男のもとを訪ねたところ、夫婦喧嘩の最中であった。椀久は、男の様子を「世につれてふびんなり」と見る。また所帯を持つべきではないと語る。(上巻の二)

・椀久は藤の森に生活の場を求める。そして新たに久米を呼び迎え、所帯を持つ。しかしぐさま生活も破綻し、夫婦喧嘩を起こす。(下巻の一)

②長堀

・椀久は役者の家を普請するため、長堀より材木をえり好みして取り寄せる。(上巻の三)

・椀久は出家後に、住まいも定めず、長堀の材木の上に寝る(下巻の四)

このように椀久の栄華を誇っていた時分の姿と、零落した後の姿は、上巻と下巻の間を挟み重複する同一の場所・土地において対比するがごとく描かれているのである。

第四章 椀久と『一代男』世之介との類似

第四章では、『椀久一世』と先行作品である『好色一代男』との関係性を考察した。

『椀久一世』は、椀久が夢の中で弁財天より蔵の鍵を授けられる場面から始まる。椀久は弁財天より蔵の鍵を授けると、「思ひの外なる金銀、大ぶんの主となりて、色町の諸分よくつかひ捨てん」と発言する。すると椀久の言葉を聞いた弁財天は、「傾城ぐるひを必ずとまるとまるとまると。やめずは末々絵筵折か道心者になるべき」と忠告する。しかし椀久は弁財天の忠告に聞く耳を持たず、夢から目覚め自宅に戻ると、蔵から現金を取り出し、自身の発言通り「色町の諸分」に財産を使い始める。そして後に椀久は無分別に財産を浪費した結果、弁財天の忠告通り破産し零落してしまう。

『椀久一世』では、主人公の財力獲得が大きな意味を持つが、それは『好色一代男』の場合も同様である。『好色一代男』の巻四の七「火神鳴の雲がくれ」では、世之介は父親が亡くなると母親より財産のすべてを譲られる。すると世之介は「何時成とも御用次第に太夫さまへ進じ申べし。日来の願ひ今也。おもふ者を請出し、又は名だかき女郎のこらず此時買ひでは」と発言する。そして物語は以後、世之介の発言に沿うように三都の遊里を中心

とした話へと展開していき、そして最終章「床の責道具」において世之介は有言実行を果たしたことが語られる。すなわち『椀久一世』の展開と、『好色一代男』の「火神鳴の雲がくれ」以降の展開を比較すると、主人公の財力獲得が物語の起点となっていることが共通している。また結末は比ぶべくもないが、主人公が財力を獲得すると、遊里・遊女を相手に財力を使うという旨の発言をすることにも共通している。さらにその主人公の発現に沿った形で物語が進行していくことも共通している。言うなれば『椀久一世』は、先行作である『好色一代男』の「火神鳴の雲がくれ」以降の展開と同一の構造であると言えよう。

*1 白井雅彦『椀久一世の物語』考二（二）松学舎大学人文論叢』第四四輯 二松学舎大学人文学会 平成二年）六七〜七〇頁

*2 長澤麻衣子『椀久一世の物語』試論—遊女松山及び「下女連れし女」について—（『大妻国文』四〇号 大妻女子大学国文学

会 平成二年）五三〜五五頁参照

*3 笠井清『椀久一世の物語』（明治書院 昭和三八年）一〇六頁、一一九頁、一二七頁

*4 広嶋進『西鶴新解 色恋と武道の世界』（ペリかん社 平成二年）一〇七〜一〇八頁